

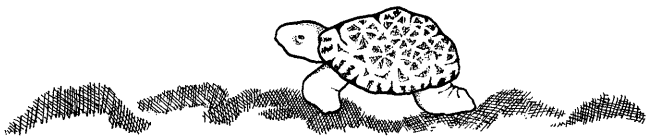
二十一世紀にむけて幼児教育を考える(8)

「学校」の役割が変わった

深谷 昌志

情報化の歩み

この夏に『子どもの生活史——明治から平成まで——』（黎明書房）を刊行した。書名の通りに、生活レベルから子どもの歴史を跡づけようとしたものだが、改めて振り返ると、現代の子どもたちがかなり変わった環境の中で成長しているのに気づく。メディアを例に考えてみよう。現代の子どもたちの回りをテレビやテレビゲーム、CDプレーヤー、携帯電話、ファックス、ワープロなどのさまざまなメディアが取り囲んでいる。小学生がパソコンで情報をファイルする。あるいはインターネットを利



用して、外国と情報交換をすることも現実化されつつある。子どもたちの回りに多様なメディアが取り巻き、①「電子メディア」の中で育つという感じになる。

そうした電子メディア時代へのきっかけを作ったのはテレビだった。そして、テレビが子どもたちの身近になり、②「テレビ時代」が到来したのは昭和三十年代の後半からである。「お母さんといっしょに」や「ロンパールーム」などの幼児番組が始まったのがその時代（昭和三十八年）で、東京オリンピックが開催される前年にあたる。

当たり前に思いがちだが、家庭にテレビが入ってくる。そうなると、子どもたちもテレビを通して世界の情報に直接接することができる。それだけに、視野が広がってくる。

テレビ以前に、③「ラジオ時代」がある。ラジオから流れる「コドモの新聞」に子どもたちが聞き入るようになったのは昭和始めである。

そして、それ以前に、④「活字メディアの時代」があり、大正に入ると、子どもたちは『少年倶楽部』や『立川文庫』に熱中している。

そうした活字以前となると、子どもたちはマス・メディアに接することなく、すべてが直接体験の中で生活している。子どもたちの回りにテレビやラジオはむろん、新聞や本もない時代である。



学校の機能低下

実をいうと、この世の中に子どもが誕生して以来、子どもたちはそうした直接体験の世界で成長してきた。

自分の目や耳、足や手でさわったものがすべてである。そうした直接体験の世界の中で系統立った知識を伝達してくれる場が学校だった。学校に行かなければ知識を獲得できなかった時代である。

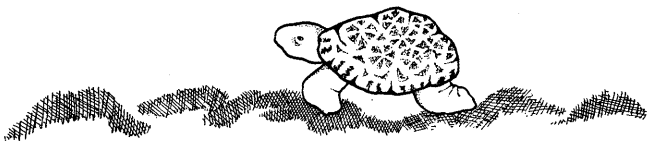
しかし、テレビ時代はむろんのことだが、電子メディア時代に入ると、情報はいくらかでも入手できる。しかし、子どもたちの回りから自然の環境が消え、子どもたちは自分の手や足、耳などを使う機会が減少しつつある。

皮肉な話だが、現代の子どもたちはテレビの天気図を通して天気を知るが、子ども部屋の外へ出て気温を感じようとしなない。それと同じように、ポテトフライを食べるはいはるが、畑でじゃが薯を見たことがない。

かつては直接体験がほとんどで間接体験が少なかったが、現代の子どもは間接体験の中で暮らし直接体験が乏しい。

それだけに、間接体験のセンターとしての学校はかつての機能を失い、むしろ、現代では子どもたちに直接体験をいかに与えるのが重要になる。

しかし、情報化の到来を先取りする形で、幼児のための情報教育とかで、パソコン



教室を開く幼稚園も登場している。パソコンのソフトの中には「お絵描きソフト」もあるし、「幼児のための英会話ソフト」もある。そうした教材に慣れると、情報化に強くなり、これからの社会に活躍できる人材の要請に連なるといのが歌い文句だ。

筆者は教育社会学を専攻しているので、コンピュータの発達とともに研究生活を重ねてきた。なんとか機種に追いつくと、コンピュータの方がグレード・アップしてしまふ。いつでも、コンピュータの発達の後を追う形である。そして、今になると、コンピュータのソフトが開発されて簡単なものになり、折角、習得した技術の大半は陳腐化して、時代遅れのものになった。それだけに、コンピュータに苦い感慨を抱いている。

コンピュータの技術が有効なのは短時間で、すぐに期限切れになる。幼児に情報教育などは不要だ。それより、情報化の進展する現代だからこそ、むしろ、子どもたちには人とのふれあいや群れ遊び、生き生きとした体験などが大事になる。

これからの学校は「知識を伝達していく場」から「友と体験を重ねていく場」への転換が望まれよう。そうした意味では、これまで遊びを重視し子どもの体験を尊重してきた幼稚園の姿勢はますます大事になる。小中学校が幼稚園の教育に学ぶ時代が来たように思われてならない。

(静岡大学)

